

藤本敏夫の生きた軌跡
「更新をくりかえして」くまざん

藤本敏夫氏の生きた軌跡

93年11月12日 松下昇 作成

大正12年（1923年）2月11日 兵庫県養父郡八鹿町に生まれる。

父（徳蔵）、母（ゆく）兄、姉（二人）、妹がある。

この年8月に父の設立した天理教会が認可され教会長となる。【9月1日関東大震災】

やっと口がきけるようになった頃、貧しいため養子に出されかけたが、「かあちゃんが いい」といって拒否。母も、このことを嬉しく思って、その後、敏夫氏がどのような生き方をしても全て肯定した。（一例として、共産党を除名されてプリントに入った時に、実家の近くの警察から調査にきたが「トッさん（敏夫氏のこと）が悪いもんになったんですか？」と反問して、警官を「子も子なら親も親だ。」と呆れさせた。

（6才）

昭和4年（1929年）4月 小学校入学。算数は苦手だったが、絵はほめられる。次第にマンガに目が開き、小遣いをためて「漫画の国」をやっと一冊手に入れる。

（11才）

昭和9年（1934年）6年生の学芸会でスサノオノミコトに殺される大蛇の8匹目のシッポの役をすることになるが、直前に柿の木から落ちて右手を骨折したので出演せず。

（14才）

昭和12年（1937年）3月 小学校高等科卒業。京都西陣の手かき友禅の徒弟になるが友禅はぜいたく品であるという戦争政策で禁止されたために職を失って帰郷。しかし、絵を描く才能は、戦後の政治や文学の活動におけるビラ、パンフレット、雑誌のスケッチに発揮され、注目を集めることになる。

（15才）

昭和13年（1938年）郷里で石田書店の店員になり、読書に没頭する。葉山嘉樹の「海と山と」を読み、感動して郷里をひそかに脱出し、東京へ出て、新聞配達、人夫などをする。労働の合間に絶えず大森の古本屋・東湖堂（主人は古藤竜介。プロレタリア芸術連盟の活動のため、昭和3年の3・15事件で2年間の服役をしたこともある。）へ行き後に店番も手伝うことになる。

（18才）

昭和16年（1941年）日米開戦・太平洋戦争開始。

天理教の勤勞奉仕（ひのきしん隊）に参加して北海道の新夕張炭鉱で一ヶ月働く。

帰郷の途中、道を聞いた巡査にあやしまれつつ、長野県山口村の葉山嘉樹を訪れるが、

かれは東京の第1回大東亞文学者大会に出席しており会えず。

(19才)

昭和17年(1942年) 神戸の三菱造船所、但馬の生野鉱山などを転々としてつとつ働く。三菱造船所では捕虜のイギリス兵と一緒に仕事をし、手まねで文学を論じ、東条を批判し合う。

(22才)

昭和20年(1945年) 日本の敗戦を奈良県で海軍航空隊の軍属として迎える。小学校の同級生41名の中で24名の男子の内17名が戦病死した。年末に九州・田川炭鉱へ行って働き始める。

(23才)

昭和21年(1946年) 3月 共産党に入り、田川細胞を作る。5月 戦後初めてのメーデーを田川炭鉱でもおこなう。赤い旗がないので、採炭夫の妹の赤い腰巻きを借り、これが会場の広場で唯一の赤旗となる。

(27才)

昭和25年(1950年) 兵庫県の郷里へ戻り、製材所の雑役などをしながら、共産党の但馬地区委員として活動し、軍事問題にも関わる。

【朝鮮戦争開始(1953年休戦)】

(31才)

昭和29年(1954年) 日教組への勤務評定に反対する山村工作隊(当時は高校生であった北小路敏もいた。)に参加した。12月に明延鉱山でのピラマキに際して他の3名と共に逮捕されて豊岡拘留所に入り、年内に出られたが罰金刑を受ける。

(33才)

昭和31年(1956年) 神戸に移転し、日雇労働などをしながら神戸西地区委員会の一員として共産党の活動に専念。

(34才)

昭和32年 和田久子さんと結婚。久子さんの兄弟も共産党の活動家であった。

(36才)

昭和34年(1959年) 安保闘争における共産党の方針に疑問を持ち始める。11月27日の国会突入闘争に関連する捜索の新聞記事で共産主義者同盟(ブント)の連絡先を知って手紙を出し、来訪したブントのメンバーに好感をもって加盟を決心する。共産党の県委員会ですら夜中から朝まで査問を受け、自己批判とブントから入手した文書の提出を厳しく要求されるが拒否。

(37才)

昭和35年(1960年) 3月15日 地区委員であったため、除名は地区党大会で決議することになったが、除名決議は全員一致にはならず、6名の女性が反対した。

6月15日 国会突入闘争における樺美智子の死に衝撃を受け、神戸駅前で糾弾のビラを配布し、かつての共産党の仲間から罵倒される。

神戸勤労者文学研究会「どろんこ文学」の樺美智子・追悼号(ガリ刷り)に「1960年6月15日われ友を失う」を発表。当時まだ日共の県委員であった詩人の直原弘道から感傷的だと否定的に批評される。

(38才)

昭和36年(1961年) ブントは、三つの派に分岐し、神戸のブント(全員が労働者)は革命的共産主義者同盟(黒田寛一議長)へ移行するかどうかで激論し、先に移行していた唐牛健太郎もオルグに来たが、吉本隆明や谷川雁が好きな人々がいるため異和があり、各人が自分の自由な判断でブントの初心を持続する活動をしていくことになる。

60年から63年まで神戸・六甲に住んでいた柴田道子夫妻や、転居した家の隣りに住んでいた部落解放教育の福地幸造と交流。

(39才〜41才)

昭和37年(1962年)〜昭和39年(1964年) ブント解体後の状況の中で、手さぐりの状態のまま革命的共産主義者同盟(革共同)の機関紙を読んだり、集会に出たりする。この時期には、妻・久子さんや仕事現場のスケッチをたくさん描いている。

【ベトナム戦争開始〜1976年休戦】

(42才)

昭和40年(1965年) 1月 革共同の労働者・浜野哲夫の参議院全国区への立候補を知り、自分も協力すると手紙を出し、一緒に活動を開始する。

5月 神戸・須磨の労働者学校で松下昇に出会う。とくに対話などはしなかったが印象に残る。

(45才)

昭和43年(1968年) 3月 三里塚闘争に参加。機動隊の激しい襲撃を体験。

【10月8日羽田闘争】

(46才)

昭和44年(1969年) 月 バリケード封鎖中の神戸大学に入り、壁に書かれた、同姓同名の「藤本敏夫」と加藤登紀子の結びつきを示す相合い傘のラクガキを見てギョッとする。

1970年代は、党派闘争の激化への疑問、過労・高血圧による身体状況のため政治活動

の比重は次第に減少していくが、政治状況総体への関心は持続し深化させ続ける。

(55才)

昭和53年(1978年) 1月 季刊「神山茂夫研究」第6号に戦前の東京での生活を記した「回想・古藤夫妻のこと」が掲載される。

(58才)

昭和56年(1981年) 12月31日 脳梗塞で倒れる。無理をして働いたので一年後に再発し、発語や手足の動作が困難になる。

(59才)

昭和57年(1982年) 10月7日 車椅子で三里塚闘争に参加。これが最後の活動になる。11月から12月まで入院。

(60才)

昭和58年(1983年) 1月4日 母の死。母が深く信仰していた天理教の再検討。

(61才)

昭和59年(1984年) 3月 唐牛健太郎の死に際して詩を書き、「原詩人」29号(7月)に、戦前の古藤夫妻を追悼した詩「李の花」と共に掲載される。

(64才)

昭和62年(1987年) 3月 高瀬泰司の死に際して詩的追悼文を書き、後に追悼文集に掲載される。12月、中山みきの初心に戻れという天理教内の造反派と楦本(いちの

もと)分署保存会の存在を知って参加。神戸・垂水教会(教団本部から離脱)の教会長(山平順三)も熱心な会員であることが判り、以後ずっと交流。

(67才)

平成2年(1990年) 字を書くのが困難なのでワープロの練習を始め、妻・久子さんとの協力で少しずつ文章を作成できるようになり、表現活動への意欲が増大する。

馬部貴司男氏の「自我通信」第2号(7月)、第3号(11月)にワープロで書いた自己史を振り返る文章が掲載され好評。

(69才)

平成4年(1992年) 11月 爆弾闘争に関連する不当ガサ糾弾裁判(原告の竹田雅博とは20年以上の知人)の機関紙で松下の文章を読んだことを契機として、機関紙や「原詩人通信」に安保闘争以降の松下への親近感に基づく表現を発表し、松下との交流が始まる。

(70才)

平成5年(1993年) <神戸大学闘争史>別冊2(4月)と<批評集>7篇・7(9月)に前記の表現が収録され、その後も活発にワープロを駆使する表現活動を展開中。

(補充)

94年5月に一応の作業を終えてからも、藤本氏の意見を聞いて訂正し補充したり、関連テーマについて意見を交換する過程は続いている。それらの重要なものは「生涯の軌跡」を既に配布した人々にも伝えていく予定であるが、現段階では次のことを補充する。

①1ページの昭和4年(1929年16才)の項目の「マンガ」について、当時と現在のイメージの違いを、より正確に示すために、「ずっと算数は2だったが、絵は10。」の次を『当時流行していた田河水泡「のらくろ」シリーズとは異質な日本漫画研究会の講義録や「漫画の国」に熱中した。』と訂正する。

②2ページの昭和20年(25年)1945年(1950年)の炭鉱での体験について資料を含めて多くの示唆を得た。特に炭鉱の坑道の崩壊を防ぐために岩盤と支柱の間にはさむ楔状の木片「ヘカミサシ」については、私が78年(87年)に刊行してきた「時の楔通信」の位相を対象化する衝撃的な啓示となっている。概念集11で論じる予定なので参照していただきたい。

③ワープロを媒介する「対話」を続けながら、私から、デスクとは無関係な坑道や路上や工場や工事現場や駐車場などで数十年の労働を続けてきた藤本氏に、それらの労働の共通の苦しさや独特の苦しさは何ですか、と質問してみた。これに対する藤本氏の答は次のようであった。

- ・炭鉱での労働の怖しさは(印象的であるとしても)、そこを離れて消えました。
- ・労働(の苦しさ)は、どこでも一緒でした。
- ・やはり(いま苦しんでいる)脳卒中の病がつらいです。(しかし)つらさを三年辛抱したら生きられると思います。それも支えてくれる人(久子さん)がいるからです。
- ・労働はつらくても一時です。

この答えが内包する重さと示唆を生かしていきたい。